## 東南アジア考古学43号(2024)

種別	タイトル	著者	掲載 ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	サンボー・プレイ・クック遺跡群 の都市地区に位置する寺院遺構: M.103サイトの発掘調査結果を中 心に	学)、チャン・ヴィタ	5-22	前アンコール時代の真臓の王都、イーシャーナブラに比定されるサンボー・プレイ・クック遺跡群の西側を占める都市地区内には、煉瓦やラテライト遺構を含む86サイトと多数の溜池の分布に加えて、格子状地割を形成した水路遺構の配置が推定され、計画的な都市構造の様相が解明されつつある。複数の祠堂によって構成された複合的な寺院も多数認められており、M.103サイトは三基の祠堂と周壁、溜池により構成されるこうした複合寺院の一つである。このサイトにおける考古学的発掘調査の結果、異なる平面形式で時代差が推測される装飾リンテルを有する二基の祠堂が確認され、また周壁においては正面の東門が不在である一方、南北辺には異なる形式の門が配置されており、同時期の一般的な寺院の構成からは逸脱する特徴が認められた。都市地区における寺院の伽藍構成や建造時期を考察する上で、本サイトにおける調査結果は示唆に富むものであった。	カンボジア、前ア ンコール時代、 イーシャーナプ ラ、都市構造、ク メール寺院	日本語
論文	バイヨン寺院の13世紀末以降の活 用と上座部仏教化に関する検討	下田 麻里子(早稲田大 学文学研究科)	23-40	「バイヨン寺院の増改築過程は4段階変遷説が通説とされるが、ジャヤヴァルマン7世の治世後の増改築はすべて同一の建造段階にまとめられ、特に13世紀末以降のバイヨン寺院およびその周縁部における建設活動は不鮮明である。本稿では上座部仏教の導入とともにバイヨン寺院の周辺に建造されたと考えられる周壁と周囲の上座部仏教に関連する衛星寺院遺構群に着目し、13世紀末以降のバイヨン寺院とその周縁部における上座部仏教化の実態解明を目的とする。そのために、遺構の現状調査とフランス極東学院による20世紀初頭の整備時の資料を手掛かりに、衛星寺院遺構の形態や配置の復元考察を試みた。その上で、周壁や衛星寺院遺構の建造順序、時期やその意図について考察することで、バイヨン寺院の上座部仏教化開始の時期や、複数の段階を経て、衛星寺院を含めた複合的な信仰の場として変容していった様相について言及した。	カンボジア、バイ ヨン、上座部仏 教、仏教基壇、周 壁	日本語

論文	14~15世紀のクリスの型式学的研究 東部ジャワ石彫資料の検討から	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	41-59	鍛造製鉄剣"クリス(Keris)"は東南アジア島嶼部地域を代表する物質文化であるが、年代基準となる資料の不足により16世紀末以前の様相は殆ど知られていない。本論文では、クリスの図像が登場する14~15世紀(東部ジャワ時代後期)の石彫資料7点を対象に、史料批判を加えた上でクリス図像の分析をおこなうことで、16世紀末以前のクリスの形態的特徴を明らかにする。分析の結果、図像に見えるクリス形態に16世紀末期以降のクリスとの連続性が見出された一方、鞘上部や鞘尻など部分的に独特の造形が確認され、当該時期のクリスの形態的特徴として指摘された。	クリス、石彫、図 像、東部ジャワ時 代	日本語
研究ノート	オランダ領東インドの文化財保護 - 博物館を中心に	坂井 隆(NPO法人 ア ジア文化財協力協会)	63-80	18世紀後半にアジアで最も早く設立された博物館であるバタヴィア協会博物館を持つオランダ領東インドでの文化財保護活動の推移について、次の時代に分けて現地保存原則と地元民関与の視点で博物館などの果たした役割を中心に検討する。前期(1778年~1913年頃):協会博物館時代後期(1913年頃~1942年):考古局設立とスマラン植民地博覧会の影響特に後期の地元民を含む研究保護活動活発化に焦点を当て、植民地博覧会開催を契機とする東部ジャワとスマトラ島アチェでの地域博物館設立の経緯と目的を考える。さらに文化財の現地保存の実態については、考古局の1923年でのジャワとマドゥラの遺跡・遺物目録から具体的に検証する。	バタヴィア協会博物館、オランダ領東インド考古局、スマラン植民地博覧会、モジョクルト博物館、アチェ博物館	日本語

研究ノート	ラオス・ルアンパバーン出土の陶 磁器生産地・編年・出土分布およ び対外交易に関する予察	清水 采穂 (Independent Researcher/ラオス国 立博物館)、Joyce White(東南アジア考 古学研究所)、Marie- Claude Boileau(ペンシルベニア大学書 古・人類学博物館)、 Bounheuang Bouasisengpaseuth(前ラオス国立博物館)、Thonglith Luangkhot(ラオス情報・文化・観光省遺産局)、Souliya Bounxaythip(ラオス情報・文化・観光	81-98	既往全調査で収集された遺物の分類作業を実施した結果、歴史	ルアンパバーン、 炻器(陶器)、磁 器、貿易陶磁、 ラーンサーン王国	英語
研究ノート	台湾における原住民人骨の収集お よび研究の歴史	陳 叔倬(国立自然科学博物館)、邱 鴻霖(国立清華大学)、翻訳: 俵 寛司(国立台湾大学)	99-113	本稿は、台湾原住民(先住民)の人骨の収集に関する研究史に 焦点を当て、主に文献調査に基づいて、形質人類学者・民族学 者・考古学者による台湾原住民の人骨に関する収集および研究 の歴史を紹介しつつ、それら人骨資料の現在の所蔵場所と数量 についての概要を明らかにすることを目的とする。日本統治時 代の初期に台湾本島の医学校が設立される以前、台湾の原住民 の人骨はかなりの数収集されていたことが確認できる。最大の 収蔵機関は東京帝国大学であり、合計約40例である。1918年に 台湾総督府医学専門学校が設立され、その後台北帝国大学医学 部が設立されたことで、台湾原住民の人骨が台湾に保管される ようになった。その中で台湾大学の収蔵が最も多く、全部で207 例が記録され、145例がタイヤル族、ブヌン族が46例、ヤミ族が 10例、パイワン族が6例であり、これらに関する出所は関連文献 に記載されている。今日、原住民人骨の返還は社会的コンセン サスとなりつつある。本稿がそれら活動に対して有益な情報と なることを願っている。なお、本稿で対象とする台湾原住民の 人骨は19世紀以降に死亡したものであることを明記する。	台湾原住民、人骨、形質人類学、返還運動、日本統治時代	日本語

特集	TAIWAN考古学セミナーについて	俵 寛司(国立台湾大 学)	117-120	台湾は日本および東南アジアの考古学にとって歴史的に深いつながりがある地域である。東南アジア考古学会においても、会設立当初から台湾とつながりの深い研究者たちや日本への留学経験者などを中心として活発な交流が図られてきた。その流れを受け、2022年度に本学会と台湾の交流企画として、学会員および一般向けに台湾考古学をテーマとするオンラインでの連続セミナー(日本語)「TAIWAN考古学セミナー・シリーズ《台湾考古学の新視点》」を2022年10月から2023年3月にかけて合計6回開催した。本特集はそれらの研究報告である。	台湾考古学、東南 アジア考古学会、 日本語、オンライ ン、連続セミナー	日本語
特集	台湾考古学から原住民の古代史を 探る	陳 有貝(国立台湾大学)	121-125	台湾の先史時代の遺跡のほとんどは、原住民の祖先が残したものと認識されている。ゆえに考古学はそれら原住民の古代史の探究を可能とする学問である。1980年代以降の台湾では大規模な緊急発掘が増加し、より多くの実物資料が地下から明らかとなり、原住民の古代史の解明を追求する研究者たちにとって、豊かなデータと様々な研究テーマを提供している。そうした研究の中でも「オーストロネシア語族の起源地」や「族」の問題は、研究者だけではなく一般の国民からも重要視されており、今後もそれらに関する研究の成果がますます増えていくことが期待できる。	台湾考古学、先史 時代、原住民、 「オーストロネシ ア語族の起源」、 「族の形成」	日本語
特集	珪酸体研究に関する台湾考古学の 現状と新発見	李 作婷(国立自然科学博物館)	127-131		珪酸体、イネ科、 機動細胞、環境復 元、先史穀物	日本語

特集	台湾北部における四、五千年前の 農村社会 – 植物園遺跡下層を例と して		133-142	リングの結果と組み合わせ、4、5千年前の先史時代の農村生活の様相について新たな考察を試みる。4~5千年前の台湾北部の新石器時代には、イネとアワの並作(混作)の生業経済モデルがすでに出現しており、定住型の集落と細かな集落の空間配置が出現している。植物園遺跡下層のイネの源流は、長江中流域から江西地域を経由し福建地域へに到達した後、さらに福建から船に乗って台湾海峡を越え、淡水河に沿って台北盆地中央の植物園一帯へと到達した可能性がある。	農村生活、イネ・ アワ並作(混 作)、大坌坑時 期、訊塘埔前期文 化、植物園遺跡下 層	日本語
特集	台湾考古学と陶磁器研究-台湾における歴史考古学の歩み-	盧 柔君(国立台湾大 学)	143-150	台湾考古学は、19世紀末に日本人学者により台湾での考古学活動が開始されてから、常に先史時代に重点をおくものであった。一方、20世紀末より、先住民研究(現在原住民族研究と称す)が注目されはじめると同時に、いわゆる歴史考古学への関心も徐々に高まりを見せるようになった。歴史文献への登場が遅い台湾の歴史考古学は、原住民族の歴史との強い関連性を持ち、また、植民地における多民族の接触・衝突が重要な研究テーマとなっているため、他の東アジア諸国と本質的に異なる	台湾考古学、歴史 考古学、原住民 族、陶磁器、消費 研究	日本語
特集	台湾新石器時代鵝鸞鼻第一遺跡に おける貝製品工房跡と生産消費シ ステムに関する予備的考察	┃ 邱 鴻霖(國立清華大 ┃	151-153	も重要である。4千年前は先史オーストロネシア語族の移動・拡 散が最も活発に行われた時期と考えられ、貝器(貝製品)を有 する文化は、その重要な特徴の一つとされている。したがって	鵝鸞鼻第一遺跡、 貝製品工房跡、生 産消費システム、 台湾、新石器時代	日本語

特集	台湾八仙洞遺跡における新発見 - 後期旧石器時代から先土器時代ま で -	曾 于宣(国立台湾史前 文化博物館)	155-160	八仙洞遺跡は、台湾東海岸の海食洞穴群に位置する台湾旧石器時代の代表的な遺跡で、放射性炭素年代測定によれば、30000~15000BPの範囲で人間が活動していたことが確認されている。本遺跡における最初の発掘調査は、1968~1970年に国立台湾大学の地質学科及び考古人類学科から編成された「八仙洞考古発掘隊」により行われたものである。それからおよそ40年を経て、2008~2015年に中央研究院歴史言語研究所の臧振華らによる4年度にわたる研究計画が実施された。その後積み重ねられた研究の成果として、台湾後期旧石器時代と先土器時代の関係性や年代、石器製作技術など、当該遺跡における考古学的文化の様相が明らかになった。	日本語
書評	『東南アジア先史時代の海域ネットワーク-南海の耳飾り-』深山 絵実梨著、2021年	田中 和彦(鶴見大学)	163-166		日本語
マングローブ 通信	展示会レビュー:企画展『海のくらしアート展-モノから見る東南アジアとオセアニア』(国立民族学博物館主催・開催期間:2022年9月8日~2022年12月13日)	小野 林太郎(国立民族 博博物館)	167-170		日本語
マングローブ 通信	展覧会評:たばこと塩の博物館 特別展「江上幹幸コレクション インドネシアの絣 イカット:クジラと塩の織り成す布の物語」 [2023年1月21日~4月9日まで開催]	朝日 由実子(日本女子 大学)	171-174		日本語

## 東南アジア考古学42号(2023)

種別	タイトル	著者	掲載 ページ	要旨	キーワード	記載言語
----	------	----	-----------	----	-------	------

論文	ミャンマー産陶器の化学分析	佐藤 由似(奈良文化財研究所) 田村 朋美(奈良文化財研究所)	5-23	14~17世紀のミャンマーと日本で出土したミャンマー産陶器のX線分析および鉛同位体比分析を実施した。分析の結果、白釉と緑釉は鉛釉であり、白釉は錫石(SnO2)によって白濁していることが分かった。一方、黒釉はカルシウムの多いアルカリ釉であった。アラカン地方ではコバルトで着色されたアルカリ釉の藍釉陶器が確認された。鉛釉の鉛同位体比分析を実施した結果、先行研究でタイのソントー鉱山の鉛が使用されたと考えられているN領域に一致した。一方、新たに入手したミャンマーの鉛鉱石も同じくN領域の鉛同位体比を持つことが分かった。ミャンマー産陶器生産に使用された鉛原料産地はタイだけでなく、ミャンマーにも存在する可能性が示された。	ミャンマー産陶 器、鉛同位体比分 析、N領域、ボー サイン鉱山、ソン トー鉱山	日本語
論文	籾の貯蔵・脱穀・脱稃方法にみられる穂摘み頴稲と高刈り稲穀の間の違い:東南アジアの文化間比較に基づく民族誌モデルの提示	学)	25-42	東南アジア民族誌において穂摘み頴稲の貯蔵、脱穀、脱稃の方法の特徴を明らかにするために、穂摘みと根刈りの民族誌を比べた。その結果、1 脱粒しにくい米品種を多用する島嶼部の伝統的水田稲作では「穂摘みした頴稲を高床倉庫に貯蔵し、随時取り出して臼杵による脱穀、脱稃・精米を連続して行う」、2穂からの脱粒性が極めて高く、登熟時期が不揃いな品種を多用する山地焼畑民では「穂摘みした頴稲をその場で踏みつけ法か叩きつけ法で脱穀し、稲穀(殻つき籾)で貯蔵する」、3他の多くの高刈り・根刈り例では、登熟時期が斉一的で比較的脱粒しやすい品種を用いるため「収穫直後に全ての稲を踏みつけ法か叩きつけ法で脱穀し、稲穀で貯蔵する」という、米品種の特徴に応じた違いがみられた。	穂摘み、高刈り、 頴稲、脱穀、脱 稃、臼杵	日本語
論文	台湾考古学における外部的影響と 内部的発展をどのように考える か?-鹿野忠雄「原ドンソン文化」 と三和文化を事例として-	俵 寛司(国立台湾大 学)	43-58	本稿では、かつて鹿野忠雄(1906-1945)により台湾先史時代の文化層の一つとして提唱された「原ドンソン文化」("Proto Dongsonian Culture")に関する学史的検討と、台湾東部先史時代の考古学的文化である三和文化および三和文化中期(1980BP-1420BP)とされる台東県金崙遺跡の発掘成果を事例として、台湾考古学における外部的影響と内部的発展をどのように考えるかについて論じる。	鹿野忠雄、原ドン ソン文化、三和文 化、台湾考古学、 外部的影響/内部的 発展	日本語

調査速報	宮古島クバカ城跡 調査概報	石井 龍太(城西大学) 本村 麻里衣(アーキジ オ) 阿部 常樹(国学院大 学) 角道 亮介(駒澤大学) 深山 絵実梨(立教大 学) 高橋 怜土(国学院大 学)	87-91	の有効な資料のひとつといえる。そこで本稿は、近現代の琉球諸島および台湾において、物質文化が伝播・進化するメカニズムの一端を解明するうえで顕著な事例としてセメント瓦があることを示し、その歴史的実態について整理する。 本稿の執筆者の一人である石井は、元々琉球諸島の近世集落に関心を寄せ各地で学術発掘調査を実施してきた。そして近世琉球期に先行するグスク時代の集落遺跡との関係を考古学的に明らかにする必要性、また沖縄島中心の政治史的な琉球国史から距離を置き、先島諸島と民衆を含めた琉球史として捉え直す必要性を考えるに至った。宮古島には石積みを伴う特色ある遺跡群が分布する。いわゆる「グスク」の地域例として捉えられてきたものの諸点で異なり、この問題提起に大いに資すると期待されよう。具体的な調査対象として、宮古島南部に位置するクバカ城跡(図1)を取り上げた。近世琉球期の文献資料にも登場し、宮古島の同種の遺跡のうち、石積みがほぼ全周保存された貴重な事例である。現在は宮古島市の指定文化財となってい	宮古島、グスク時 代、石積み、城 跡、集落跡	日本語
研究ノート	近現代の琉球諸島および台湾にお けるセメント瓦	波多野 想(琉球大学) 山極 海嗣(琉球大学) 武島 早希(琉球大学)	73-84	えた瓦を生産した。すなわち、セメント瓦は、近現代の琉球諸	セメント瓦、島嶼研究、琉球諸島、台湾、物質文化	日本語
研究ノート	ジャヤヴァルマン7世期における 統合のイデオロギー -観音像と「仏の花飾り」-	宮﨑 晶子(茨城キリスト教大学)	61-71	本稿は「毛孔に天人をあまた宿す」観音像に焦点を当て、ジャヤヴァルマン7世期における統合のイデオロギーを明らかにすることを目的とする。筆者の調査から、本像は領域の中央のみならず周縁からも発見されることが分かっている。このことから、本像はアンコールにおいて統合の役割を担っていたと考えられる。本像の典拠は『カーランダヴューハ』第2部第2章「毛孔の描写」であり、本章は『華厳経』の影響を受けている。『華厳経』のメインテーマは「相即相入(anyona-	『カーランダ ヴューハ』、『華 厳経』、「入法界 品」、観音、統合	日本語

展望	東南アジアの古代都市遺跡につい ての、私の疑問	上野 邦一(奈良女子大 学)	95-98	昨年、東南アジア考古学会の年度大会の際、研究大会を持った。研究大会に参加できなかった私は、後日、発表者に当日の発表資料を送って貰った。なぜ、そのような依頼をしたかと言うと、東南アジアで発見されている古代都市についていくつかの疑問があり、その解明の糸口を得たいと思ったからである。私の疑問は主に3点である。1)アンコール・ボレイとオケオの関係、2)イーシャナプラほか、いくつかの都市の形状、3)都市内の核となる施設。これらの疑問は解決していないが、若い研究者が将来、私の疑問を解明することを期待して、書きとどめることにしたのが、本拙稿である。	日本語
書評	『A History of Maritime Trade in Northern Vietnam, 12th to 18th Centuries: Archaeological Investigations in Vandon and Phohien』Yuriko Kikuchi 著、 2021年	田畑 幸嗣(早稲田大学)	101-102		日本語
書評	『アジアの博物館と人材教育-東南アジアと日中韓の現状と展望』 山形 眞理子・徳澤 啓一 編著、 2022年	杉山 洋(龍谷大学)	103-105		日本語
書評	『図説 世界の水中遺跡』木村 淳・小野 林太郎 編著、2022年	野上 建紀(長崎大学)	106-108		日本語
マングローブ 通信	台湾研究滞在記(2021年8月~2022 年7月)	俵 寛司(国立台湾大学)	109-110		日本語
マングローブ 通信	追悼 日越共同考古学調査の懸け橋 一ハン・ヴァン・カン教授	菊池 誠一(昭和女子大 学)	111-112		日本語
マングローブ 通信	追悼 チャンパー、扶南考古学の開 拓者―ルオン・ニン教授	菊池 誠一(昭和女子大 学)	113-115		日本語

## 東南アジア考古学41号 (2022)

種別	タイトル	著者	掲載 ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	13世紀末~16世紀アンコール・ト ムの上座部仏教寺院建造時期に関 する検討	下田 麻里子(早稲田大学)		寺院の建造時期を検討することで、同都市の上座部仏教都市化における都市構想とその過程を明らかにすることにある。分析手法として、アンコール・トム内の上座部仏教寺院を対象とした類型学的分類を行い、各分類に属する遺構の基壇繰り型や	Cambodia, Angkor Thom, Theravada Buddhist Monasteries, Typological Classification, Chronology	英語
論文	遺跡の「真正さ」を探る:アンコール遺跡群バンテアイ・クデイの近現代史	丸井 雅子(上智大学)	25-40	バンテアイ・クデイはアンコール期(802-1431)の12世紀末頃 建立された大乗仏教寺院遺跡であると解釈されている。アン コール期の寺院建築群は、近代以降は伝統的本質へ回帰する文 化表象として扱われ、1992年の世界遺産登録がそれを強化す る。特に現代においては遺跡と地域住民を「伝統」や「文化景 観」といった概念で一括りにするが、本稿はそうした本質主義 的見方への批判を出発点として、バンテアイ・クデイと地域住	歴史地域学、遺跡 の「真正さ」、考 古学、オーラル・ ヒストリー、アン コール	日本語

論文	稲作農耕圏の民族誌における火処 タイプの選択理由	学)	41-56	稲作文化圏における伝統的火処タイプの選択理由を解明するために、東南・南アジアの火処民族調査と東アジアにおける文献調査を組み合わせて火処の地域間比較を行った。その結果、火処タイプ(煙道付カマド、煙道なしカマド、三石・五徳炉、自在鉤炉、七輪)の選択理由として、以下のように、暖房、主食調理法、家屋構造、燃料の種類などが重要であることが示された。第一に、暖房機能が必要な地域では、鍋を吊る(自在鉤)炉や煙道付カマド(特にオンドル・炕)が用いられる。第二に、薪燃料が希少な地域(南アジア)では、熱が逃げにくい小型カマドが用いられる。第三に、高床建物ではカマドを置けないため、三石炉が選択される。最後に、主食調理法については、側面加熱蒸らしを伴う湯取り法炊飯は蒸らし時に側面加熱ができる三石炉、長時間強火加熱が必要なウルチ米蒸し(中国南半、ジャワ)や短時間強火加熱が必要な炊き干し法(中世以降の日本・韓半島)はカマド、という結びつきが観察された。	<u></u>	日本語
論文	東ミクロネシアにおける人類の移 住年代と貝利用―ポーンペイ島で の最近の発掘成果より	,	57-72	ポーンペイ島を含む東ミクロネシアへの人類移住は、約2000 年の間に西ミクロネシア、メラネシア、あるいはポリネシア方 面など様々な方向から行われてきた痕跡がみられ、複雑な様相 を示している。しかし、初期居住は、言語学的にはメラネシア 方面を中心に大まかに南から北の方向に向かう移住が主となっ たと考えられ、考古学的にもその可能性を示す痕跡が発見され つつある。本稿では、こうした可能性を検証するために2019年 から開始したポーンペイ島での発掘調査とその成果について、 その初期居住年代とミクロネシア内での地域間比較を行う上で 考古学的に注目されてきた貝製品をふくむ貝類の利用に関する 新たな資料を軸に、東ミクロネシアへの初期の人類移住とその 物質文化や貝利用の特徴について総合的に論じる。	°.	日本語

研究ノート	古代中世クメール史の動態検証に おける古気候復元データの利用に かかる諸問題	下田 一太(筑波大学)	75-92	古代中世クメール史の舞台であったインドシナ半島の古気候復元や、アンコール遺跡群の古環境復元に関する研究が近年進展している。こうした古気候や古環境復元の成果は、歴史学に新たな観点をもたらしているが、これまでのところアンコール時代後期の王朝衰退に関係した文脈での考察に傾斜しており、アンコール王朝の成立時期や、プレ・アンコール期に遡るクメールの通史的な動態解釈に援用した研究事例は限られている。本稿では、プレ・アンコール期以降の刻文、寺院、水利施設造営の時代的な推移をアンコール王朝の支配機構の集権力の指標とし、古気候復元データとの相関を検証することで、そこに一定の有意な関係が認められることを示すとともに、アンコール王朝の消長の動態については複雑な諸条件の因果を考慮する必要があり、古気候復元データの利用にあたっては多様な課題があることを論じるものである。アフリカを起源とする現生人類(ホモ・サピエンス)は、後期更	クメール、アン コール文明、古気 候、古環境	日本語
研究ノート	サピエンスによる更新世期の島嶼 移住と渡海に関する一考察: ウォーレシア・琉球列島における 事例から	小田 静夫 小野 林太郎(国立民族 学博物館)	93-109	新世にはアジア圏の熱帯・亜熱帯島嶼部へ拡散した。このうち サピエンスによる最古の渡海事例として知られるのが、東南ア ジアに広がるウォーレシア海域におけるサピエンスの渡海や島 嶼移住である。サピエンスはさらに5万年前頃までに約80キロ以 上の渡海により、オセアニア圏となるサフル大陸(現在のニュー ギニアやオーストラリア)への移住にも成功した。一方、東アジ アでは4万年前頃までには日本列島で旧石器時代遺跡が出現し、 3万年前までにはその南に広がる琉球列島の島々にも痕跡が出現 する。特に近年、石垣島で2万8000年前頃に遡る複数の更新世人 骨が発見されたことは、南方方面からの移住があった可能性も 示唆している。本稿ではこれら近年における新たな発見を踏ま えつつ、更新世期のサピエンスによる渡海方法や島嶼移住の文 化的背景について、ウォーレシアと琉球列島における事例を対 象に、現時点での総合的な比較検討を試みる。	サピエンス、更新 世、渡海、島嶼移 住、ウォーレシ ア、琉球列島	日本語

研究ノート	東南アジアの宗教考古学研究序論 一世界宗教を対象として一	坂井 隆(国立台湾大 学)		の大部分は宗教関連のものである。そのため日本考古学とは異     宗教、  なって、東南アジア考古学では宗教考古学とは、決して特定の	文考古学、世界 文、礼拝建物遺 埋葬遺構、礼 遺物	日本語
書評	『ものがたる近世琉球-喫煙・園芸・豚飼育の考古学』石井龍太 著、2020年	宮城 弘樹(沖縄国際大学)	131-132			日本語
マングローブ	追悼 ベトナム考古学の開拓者 -	菊池 誠一(昭和女子大	133-136			日本語
通信	ハー・ヴァン・タン教授	学)	199-190			口平品
マングローブ 通信	台湾研究滞在記(2020年9月~2021 年7月)	俵 寛司(国立台湾大 学)	137-140			日本語

## 東南アジア考古学40号(2021)

種別	タイトル	著者	掲載 ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	カンボジア、サンボー・プレイ・ クック遺跡群都市区出土土器の研 究	横山 未来(早稲田大学)	5-20	シャーナプラに比定されており、プレ・アンコール時代の真臘 の王都として繁栄したとされる。本稿では、同遺跡群における 都市の利用年代とカンボジアの土器変遷について考察を行う	カンボジア、プ レ・アンコール時 代、サンボー・プ レイ・クック遺跡 群、土器	日本語
論文	現代のモノの移動と考古学:ある バンチェン土器の事例から	田代 亜紀子(北海道大学)	21-33	バンチェン遺跡(タイ)は、タイの代表的な先史時代の遺跡である。1960年代の発見、1970年代の発掘に続き、古美術商により、バンチェン土器といわれる土器の取引がおこなわれ、多くが国外に流出すると同時に偽物も登場した。土器のような可動遺産は、世界中の博物館に対する文化財返還問題が起きている	モノの移動、考古 学、パブリック・ アーケオロジー、 バンチェン土器	日本語

研究ノート	マレーシア・クダ州カンポン・バル寺院遺跡出土の貿易陶磁	森 淳子(マレーシア国 民大学)	37-53	マレーシア・クダ州カンポン・バル寺院遺跡は、同国の原史時代を代表するブジャン谷遺跡群内にあり、地元研究者は仏教寺院と推定している。2016、17年の発掘調査で出土した貿易陶磁片1,371点を産地別にみると、中国が50%、ペルシャが18%、ベトナムが6%、タイが2%で、ペルシャ陶器の比重が2番目に高かった。大宰府の貿易陶磁編年に基づく分析では、全体の61%で同編年が利用でき、うち21%は8世紀後半から10世紀中頃、25%は11世紀後半から12世紀後半で、14世紀後半以降は大幅に減少していた。これらの分析から同遺跡を含むブジャン谷は、中国とペルシャを結ぶ貿易ネットワークの1拠点で、8-9世紀から14世紀頃までの長期にわたり利用されていたと考えられる。	マレーシア、ブ ジャン谷、貿易陶 磁、ペルシャ陶器	日本語
研究ノート	現代タイ社会における「考古学」と遺跡の保存	白石 華子(京都大学)	55-69	本稿は現代タイにおける考古学の営みの全体像を明らかにし、またそれが遺跡保存においてどのような指向性を持つのかという点について予察的な検討をおこなうことを目的としている。初めにタイの考古学について歴史的背景や組織体制、教育、法制度の面から検討し、「考古学」と呼ばれる営為の範囲や中身について基本的な整理をおこなう。またその中心的アクターである文化省芸術局とシンラパコーン大学が近年おこなった遺跡保存の実例を示し、両者の遺跡保存に対する姿勢やその特徴、課題、そしてその背景にある政治・経済・学術的要因について考察することで、タイにおける考古学と遺跡保存の関係の一端を明らかにする。	タイ、考古学、遺 跡保存、芸術局、 シンラパコーン大 学	日本語

				It is well established that Japanese Hizen ceramics were exported in large amounts to Southeast Asia during the second half of the 17th century. In Mainland Southeast Asia,		
資料紹介	ラオス・ヴィエンチャン旧都城内 出土の初期伊万里	清水 菜穂(Lao National Museum)	73-79	porcelain or so-called "Early Imari ware", produced during the 1630~1650s is yet very few. Vientiane was established as Lao's capital of Lane Xang in 1560. A large-scaled excavation survey was undertaken recently in the old city of Vientiane to find 285 pieces of Hizen ceramics in total. My detailed	arly Imari ware, lizen porcelain, rade ceramics, ane Xang ingdom, ientiane	日本語
書評	『ヒトはなぜ海を越えたのかーオ セアニア考古学の挑戦ー』 秋道 智 彌・印東 道子 編著、2020年	江上 幹幸(沖縄国際大学)	83-86			日本語
マングローブ 通信	コロナ禍で行われた若手研究者に よるオンライン勉強会	東南アジア考古学オ ンライン勉強会	87-89			日本語